

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'78 春

連絡先

東京都渋谷区代々木二丁目二番一
婦人会館内 〒151

発行 一九七八年三月二〇日

運動を拓げよう

駒野陽子

私たちの会が、会員制という新しい形でスタートして一年。運営の最低規模、会員三〇〇名に達したのが昨年度。今年になって会員は四〇〇名を越えました。小・中の指導要領が出揃い、高校指導要領の作成も進んでいる今、現場でも新教育課程の中の家庭科共修実現の動きが見られます。教育行政の側には相変らず現状維持の姿勢が強いのですが、社会的にはようやく家庭科共修への関心と理解が拓がってきたようです。

これからは、いっそう弾力的で多様な運動が必要とされるでしょう。「家庭科、なぜ女だけ」も出版されました。既刊の資料も追加、改訂して再版を準備中。新しい段階を迎えて七八年度も更に多くの会員の参加をうながし、みんなで新しい運動の方法を創造して行きましょう。

もくじ

| | |
|------------------|------|
| 運動を拓げよう | (1) |
| 集会のおしらせ | (1) |
| 一・一四集会報告 | (2) |
| 高校生の意見を聞いて | (5) |
| 最近の動きから | (6) |
| 大阪市大の大学祭に参加して | (7) |
| 自治体へ要望書 | (7) |
| 自治体における婦人施策をたどる | (8) |
| 東京では | (9) |
| 北海道から | (9) |
| 関西グループから | (10) |
| 日本家政学会関西支部会集会報告 | (11) |
| 近畿高等学校家庭科研究大会の歩み | (12) |
| 日教組教育研究沖縄集会の報告 | (14) |
| 世話人会報告 | (15) |
| おねがい | (16) |

集会のおしらせ

四月二二日(土)

午後一時半～四時 討論集会

午後四時～五時半 総会

於・婦人会館

(電話 〇三・三七〇・〇二三八)

討論集会テーマ

技術・家庭科の共修をすすめるために

障害をどう乗り越えるか――

報告者

杉並区阿佐ヶ谷中学 榎田真澄氏

昭島市清泉中学

武市成子氏

七八年度総会議題

* 七十七年度総括・七十七年度決算

* 七八年度の運動のすすめ方

* 七八年度予算

* その他

一・一四 集会 報告

△テーマ▽ 生徒が語る 家庭科共修

高校生の話し合い

出席者

高校での共修経験者

非経験者

共修実践者

堀部さん(都立文京高校・二年女)

原さん(長野県立梓川高校・卒業男)

岡村さん(鎌倉学園・三年男)

五十畑さん(都立大附高・二年女)

内田さん(早大学院高・一年男)

斎藤弘子先生(都立農林高校教諭)

共修の問題の当事者は、第一に家庭科を学ぶ生徒たちです。

そこで、今度の集会では、生徒たちにこの問題についての意見を聞くことにしました。

一人一人がまとまった報告をするという従来の集会のかたちでなく、出席者全員が八の字型に並んでいっしょに話し合う、という新しい試みをしてみました。

高校の新しい指導要領案が年末に発表されるという情報が入っていたので、その検討も

いっしょにするつもりでこの日に集会を開くことにしたのですが、指導要領案の発表は大中に遅れ、この集会で検討することはできませんでした。(発表が遅れているのは、主として総則の部分で意見が一致しないためで、発表は五月になると言われています)

半田たつ子さんの経過報告(参議院決算委員会でのやりとり、愛知県教育委員会が特性教育の強化をうたっていること等、六頁参照)のあと、話し合いに入りました。

女子のみが料理裁縫の家庭科をやって、男

子が入ると社会や経済と巾をひろげる。それ

に対して女子は不公平感はないのだろうか。ほくが一ばん問題だと思ふのはいわゆる料理裁縫といった家事の分野を女子だけが学ぶことです。たしかに女子だけがずっと一貫して家庭科を学んできて、ほくたちも高校にな

って突然同様に学べと云われてもついていけないだろうし、男子はやる気をなくすだろう。だから現状では無理だと思ふけれど小中高と一緒にやったら男子だって充分やるだろう。

先程、男子が調理実習がたのしいと云われたが、それはおままごとのたのしさではないか。授業を遊びのおままごとにしてしまっ

てはいけないと思う。斎藤先生 男子むき家庭科、女子むき家庭科が問題になっているが、職業高校だとコース別で同じ学年でも教科にアンバランスがあるのです。コース別でいろいろな種類の家庭科があるのです。

それで四単位のうち二単位は男子も一緒にやる高度な(?)家庭科と、あとの二単位は従来の二種類あつてその矛盾を感じています。それと家庭クラブの活動との関係もある。これは女子だけの組織で、共修をかか

持っています。一年のときも二年のときも同じです。今、自分がうけている家庭科というものに疑問を

ことに重きをおいたが、先生が片づけることを強く言われた。どうしても女子だけが片づけてしまふんですね。

広い意味でいろいろな経験ができた、重みのある授業でした。

堀部 中学のときは別々で高校で一緒になったので自分は一体どんな授業をやるのかと思

っていたんです。一年のときは男女共修で経済のこととか比較文化的なことなど巾を広くして男子も興味をひくように工夫されていました。

二年生になると、男女別々にわかれ、男子は体育、女子はそこで従来の家庭科、教科書に則った家庭科をやりました。

男子とやったのは家庭科というより生活科で、衣食住のところでは食品添加物の問題などをやり、生活と家庭というところでは保育の問題をやりましたが、わたしはこの保育のところ、家庭は男女でつくるものだということをつくづく考えさせられた。一緒に勉強してよかったと思っています。

やっぱり楽しかったのは調理実習、女子だけでは味わえない楽しさがありました。男子にも一ばん人気があつたようです。

岡村 共修組のはなしをきいていると、男子むき家庭科と女子むき家庭科があるようにみ

げながら女子だけのクラブは矛盾ではないかと考えています。

家庭科の中味

司会 原さんは家庭科で一ばん興味をもったものは何でしたか。

原 一ばん興味をもったのは食品添加物でした。炭酸飲料にどのくらい毒性が含まれているかということ、毛糸を染めて実験してみた。授業は椅子に坐って先生の講義をきくというより自分たちで動きまわって調べるといいうが多かった。外にもずい分行きましたし。

五十畑 自分たちの学んだ家庭科は一年の必修のときも机にむかって教科書を使つての授業というのはいくらもなかった。はつきり云えばいい加減な授業でした。やったのは編み物と調理だけ……。ノートもないし先生が出欠をとられて、どちらでも好きなものをやっ先生が回って来られたとき教えてもらう。献立も編み物も自分の好きなものを計画をたててやるだけです。時間は七・八時限で先生は講師だけ。

一年のときも二年のときも同じです。今、自分がうけている家庭科というものに疑問を

岡村 はなしを聞いてみると家庭科は学校の先生たちからも軽視されてしまっているようだ。これはもう教育制度そのものから変えていかなければどうしようもないのではないかと、それには実践が伴わなければ駄目だ。また、たのしくやることは大切だ。つめ込み式授業でなく男女間の協力の重要性を学ぶのも家庭科だ。中学からやっていたら協力に身について疑問を持たなくなる。

内田 家庭科で問題なのは男子を参加させることでなく女子にだけ料理裁縫をやらせる必要があるかということだと思う。あるのなら男女ともにやらせるべきだ。どちらか片方というのはいかぬ。共修のカチは一応整え、中で男子むき女子むきと分けるのはスリカエである。それが一ばんこわいと思う。

男と女の特性について

司会 先程愛知県の話(六ページ参照)もあったが、男と女とはどう違うと思うか。
原 男と女は競争してはいけないと云われるが自分はいい意味で競争し感化しあうことは必要だと思う。そして自分自身をみつめることで自分も変えていくし相手もかえていくことが男女の間では必要ではないか。

をむかれるようでは困る。そのためには内容を精選するとともに先生方の共同研究の場が保障されなくてはという意見です。

研究しつつ試行錯誤でしかも他の領域(社会科、理科)の先生とも話しあっているものではないかという意見もありました。
また制度が先か、内容が先かという議論になったとき、戸山高校の和田典子さんから「ともかく男女とも共修にすることに教育的意味がある。そこで女だけという差別をしていては駄目だ。内容が先か制度が先か考えることは現実的ではない」と強い指摘がなされました。

そして、「内容に関しては現に今、女子はやっている。『男子が入れば今のは駄目』ではおかしい。今やっている以上、内容はいつでも問われなければならない。それには先生方が全力投球していくより仕方がない。人間がひとり生きていくことができるよう、基礎的なことを身につける。それをやるのが家庭科である。家庭科を教育として考えたなら男と女の差別など考えられないことだ。今の指導要領では限界があるが、教室へいくのはわたし達教師自身なのだから頑張らしよう」と強く呼びかけました。

(文責 嶋田道子)

五十畑 はっきりわからないがからだの違いだけでなく性質、物の感じ方などに違いがあるのではないかと……

内田 特性論というのがあるが自分はないと思います。お互い背負ってきた歴史や社会的な要請も違う。しかし全部が同じではない。たしかに違いはあるかもしれないがその違いをなくそうとするのが教育であり、類型に強制するような教育は間違っていると思う。

斎藤先生 共修し終ったあと、毎年アンケートをとっているのだが、興味のあったこと、印象深かったことなど男女ともに共通している。ところが共修してない高校生対象にアンケートをとったら男子、女子の興味の内容が全く違うわけです。保育などは男子は最低でした。したがって特性があるからという考えをなくすために共修は役立っていると思う。
また家庭科はお遊び的だという批判がある。しかし今の学校教育では物にふれる教育がない。遊び的要素があっても生活にふれる教育、物をつくって喜びたべるというのは家庭科しかないのではないかと考えています。

原 ぼくは高校時代施設訪問をやり、保父さん保母さんの日常的な労働条件にふれる中で何で彼らはこんな恵まれていないのだろうかと考え、そこから福祉に関心を持ち出して

結局大学は福祉関係をえらびました。

岡村 ぼくは中三のとき、母親が死んだ。家族がバラバラにならなかったのはボクや姉が家事雑用をやってきたからなのです。そこで一ばん役に立ったのは小学校の家庭科で習った味噌汁のつくり方などでした。ぼくの家のようになつた場合、家族のだれかが犠牲になるべきではない。みんなやるべきだと思ふ。そのために男だから女だからの区別なく一応のものはこなせるようにしておかなければならないと思います。

参加者全員の話し合い

つづいて参加者全員で話し合いになりましたが、先ず話されたことはいま共修問題の関心度が薄れてきているのではないかと、わたし達は家庭や学校や職場で共修の話題を提供して共修推進の雰囲気をつくっていくべきではないかということでした。

また埼玉の高校の先生から家庭科の教師は五〇代の人と採用したての二〇代の二派に分かれている。五〇代の方は新しいカリキュラムはこなすのがたいへんだし新しい人には経験がない。家庭科は殊にキャリアが必要である。授業しても生徒を説得できなくてソッポ

高校生の意見を聞いて

芦谷 薫

竹内みどり

「女子だけの家庭科より楽しい学習であった」「将来の進路を決定させた学習であった」等、男女共修で家庭科を学んだ高校生の発言から共修学習が意義深く学べ、自立した生活者をめざした学習の体験がしっかり根ざっていることが感じられ心強く思いました。又高校家庭科を学習してない男子学生からは、亡くなった母の代わりに姉と共に家事を分担するなかで男子にも自分の身のまわりのことが出来ることの大事さを体験したと、共修の理念が若い人にも理解され広がっていくことを示していると思いました。一方共修実施校でも二単位は従来通りの内容で女子のみという所が多く、「現在の共修は社会的観点の大きい部分ばかりで、料理裁縫は女子向きとして内容なら、女子だけというのもおかしい」という男子校生徒の鋭い発言に答えるには、男女共修必修の制度化を実現することだと思

います。そして高校生の発言を聞いていて若者の確かに判断する目を見た感じがしました。

(桐朋学園)

また全般には、中学では、技術・家庭が男女に分かれていたことに皆それほどの疑問を感じず、さらに高校で「共修」になればそれはそれで「いいこと」とごく素直に受け入れていることなど、実に柔軟(順?)だなぁと思ふ半面、だからこそ、青年期のその柔らかな時期への教育の果たす力の大きさをしみじみと感じました。制度が人間に及ぼす影響はやはりデッカイ!

(婦人民主新聞・編集)

運動の動きから

半田 たつ子

昨年十二月十六日、市川房枝氏が参議院決算委員会にて教育問題を質問された。まず砂田重民文相に「高校家庭科の問題とからんで、大臣は家庭というものを個人として文部省としてどう考えているか、その考えを教育普及するのには、学校・社会教育のどこか」と。だが文相は家庭観については触れず「教育は家庭、学校、社会のどこでも行うべきで、切れ目が無い」と答えた。市川氏が「中学校の男子が家庭科の一部を学習できるようにしたのは一歩前進だが、高校学習指導要領では、家庭科をどう扱うのか」と問うと、諸沢正道初中局長は「教課審の答申通り、家庭一般女子必修という方向で検討している。だが中学校で男子にも一部家庭科を学習させる道を開いたこととも関連して、高校男子にも必要に応じて選択履修させる、という考え方でどうか、というくらいのところを原案を作成中」と答えた。市川氏は「家庭は男と女、夫婦が協力して作るもの、男子にも家庭科を教えるべき」と重ねて念を押された。まわりくどい表現ながら、担当局長に「高校男子に家庭科

選択履修の原案作成中」と答えさせたのはさすがだと思われ、同時に、やはり時代は遅々としても歩んでいると思えた。

だが、東京都における男女共修先進校、都立文京高校が「(大学進学のための)基礎学力の充実」という学校方針のもとで、昭和四十六年以後の授業実践を閉じることになったのは、惜しんでも余りある。本号の集報報告にもあるように、学習した生徒も喜び、他教科の教師からも支持の声が高かったと聞いている。結局、制度の確立されない中で、一校わずか二、三人の教師が全力をふり絞っても、受験という巨大な魔物に吞まれてしまいうケースを見るようで辛い。だからこそ、実践校を点から線・面に広げること、共修を保障する体制を作ることが急がねばならないのだ。

一方、技術・家庭の「相互乗り入れ」が指導要領に記されたことは、今までどちらかというと消極的だった教師達にも、共修に取り組む意欲を生んだ。静岡県の昨秋の官制研究会でも、四支部から男女共修の発表があり、分科会も一部は男女合同で行われて、活発な討議があり、積極的に実践しようという意欲が高まったという。北海道教育大附属函館中の森真知子氏(会員)からも、同大附属釧路中の共修の授業を参観し、早速技術科教師と共修にするための学習会を週一回開いているとの便りがあつた。

愛知県教委が昨春出した県立学校「教員研修の手引き」には「男女の特性を育てる教育の推進」が、当面する課題十のうちの一つに堂々と掲げられ「男女の違いに対する理解を深めることによって、はじめて競争関係からお互いの尊敬と協力という相補関係が成立する」とある。

「家庭科を男女共修に」が高まっても、教材等の研究が展開しなければ完全な実現がむづかしいことなどを話して、今後共集团的な運動や研究が必要であることをアピールした。まじめな気持ちのよい集会で、ひやかしに入ってきた男子学生もまじめに聞いていたのが印象的である。

「家庭科を男女共修に」が高まっても、教材等の研究が展開しなければ完全な実現がむづかしいことなどを話して、今後共集团的な運動や研究が必要であることをアピールした。まじめな気持ちのよい集会で、ひやかしに入ってきた男子学生もまじめに聞いていたのが印象的である。

＊一月一四日には高校生を招いて意見を聞きましたが、昨年一月には共修問題を考える大学生から世話人が招かれました。

大阪市大の大学祭に参加して

佐藤慶子

昨一月五日、大阪市立大学の婦人問題研究会に招かれ、大学祭のティーチ・イン「女性解放と教育を考える」に参加し、「家庭科の男女共修をすすめる会」のアピールを行った。同学は、全学のうち女子が一〇〇名、昨年は同研究会を中心に女子学生に呼びかけ、一階にしかなかった女子用トイレを他の階にもふやすことにより成功したという。婦人問題への認識は女子学生でも今まで必らずしも高くはなかったと担当者は語っていた。「しかし、ある時、どんなに勉強したか、婦人問題がわからなかったら何にも始まらないということがわかりました」そして、そのことがはつきりした時、今まで小さい頃から次第第に感じさせられていた女性への差別問題を今こそ女子学生みんなの問題として捉え、勉強しなければと感じて「会」を作ったそうである。その言葉どおり、全くまじめに、自分たちが生まれて以来、折り折りに感

じさせられてきた女性差別をまとめ、その差別が何ゆえ生まれたかという歴史や、家庭科教育等教育でどう定着してきたかをさぐってパンフレットにまとめ啓蒙活動をしている様子である。家庭科の問題も全くとく調べてあって、今さら私たちがアピールするまでもなかったが、家庭科教師になる生徒もいると聞いて、現場でのむづかしさ、特に意識として

自治体に要望書

〔要望書〕

↑ 行動計画に家庭科の男女共修を

世界行動計画、国内行動計画に続き、今冬都道府県ごとの行動計画づくりがすすめられています。(そのすすみ具合については、次ページの公開質問状グループの報告参照)国内行動計画には、残念ながらはつきりしたかたちでは共修の問題は盛りこまれていませんが、各自自治体の行動計画にはぜひ共修について明記してほしいものです。

一九七五年の国際婦人年世界会議において採択された「世界行動計画」をうけて、婦人問題企画推進本部は、一九七七年二月一日、「国内行動計画」を発表しました。

そのためには、地域ごとに自治体へ直接働きかけることも必要ですが(特に「行動計画をつくらない」と言っている神奈川県、愛知県等には強い働きかけが必要でしょう)、世話人会ではまず次のような要望書を各知事あてに送りました。

この計画は、今後一〇年間を見通す展望に乏しい、抽象的で次元が低いなどの強い批判を浴びましたが、その中にすら「従来の男女の役割分担意識にとらわれない教育・訓練を推進する」こと、学校教育で男女平等、相互の協力・理解について学習させるため、「特に各学校における社会科・家庭科等関連教科

及び道徳等において、新しい時代に即応した学習指導」が行われる必要が記されています。

しかるに、一九七六年二月一八日、教育課程審議会は、高等学校における女子の必修の家庭一般を「従来どおり」と答申し、いま答申の線に沿って、学習指導要領作成の作業が進行中です。

中学校技術・家庭については、一九七七年七月二二日発表の学習指導要領で「男子向き、女子向き」の言葉が消え、わずかながら相互に選択履修できるようにしたのは、国内行動計画を多少生かしたものと云えますが、根本的な解決はされていません。

男女平等の実現は、今や世界的課題です。その中核には、性別役割分業意識を払拭する教育が位置づけられるべきです。

現につくられた自治体独自の行動計画に、私たちは大きな期待を寄せています。家庭科の男女共修は、現在でも実施している自治体や学校があるように、新しい学習指導要領のもとでも、自治体ごと、学校ごとの実施は可能です。行動計画の中に、ぜひ次の事項を明確に記述していただきたいと願います。

中学校技術・家庭、ならびに高等学校家庭一般は男女共修にすること

行動計画を策定する予定のない県もあると聞いていますが、世界の潮流に目を向け、早急に、自治体をあげて行動計画に取り組まれるよう望みたいです。

(内は都道府県名)

自治体における 婦人施策をたどす

国際婦人年をきっかけとして
行動を起こす女たちの会
公開質問状担当グループ
金谷千都子

昨年二月、総理府から国内行動計画が発表されてすでに一年、その後、各自治体では女性のための施策をどのようにすすめているのか、大いに気になるところである。

そこで「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会・公開質問状担当グループ」では、昨年末各自治体首長宛に質問状を出した。その回答結果は、率こそよいが(回答率七〇%)内容は一言で云えば、婦人問題の本質を理解できておらず、女性にとつて前途多難を再認識させられるものであったと云える。

質問の一つは、自治体で「行動計画」をつくっているかどうかで、「できあがっている」県はゼロ。「つくりつつある」県が四(北海道、岩手、東京、高知)。「これからつくる」県が一(宮城、福島、埼玉、山梨、富山、長野、和歌山、山口、佐賀、熊本、沖縄)。

そして「つくる予定はない」という県が一二(青森、山形、新潟、栃木、群馬、神奈川、静岡、愛知、三重、島根、岡山、広島)であった。その理由は「まだ検討中」というのがほとんどである。

質問の二は、婦人に対する新しい施策についてたずねたのだが、国際婦人年の精神にのっとりた施策は全くみられず、ほとんどが従来の婦人対策の延長としか云えないものばかりである。

たとえば、審議会その他の分野への女性の進出をあげている県は多いが、その部門をみると、従来の役割分業の路線上とみられる消費者、教育、保健衛生、福祉といった分野にかぎられており、性差別の固定観念は未だ根深いというか、全くその点に気づいていないといった感じを受ける。さらに、婦人参加の増加対策を具体的にあげていない点も指摘したい。

雇傭問題についても同様で、愛知県で女子

公務員の採用、登用について述べている以外は、雇傭問題にふれた他の四県を含めて具体性に乏しい。

質問三の母性を守るための施策についても従来の妊産婦の保健対策の域を出ない県が多く、さらに婦人の老後、中高年独身婦人の生活安定のための施策についての回答も少なくこれらの女性が男性と異なる現状におかれているという問題の認識欠陥が著しい。

さらに加えるならば、これらの回答を寄せた部署を見ると、婦人問題を専門に担当する部署がない点が明らかに。この点からも各自治体が女性に対する問題をどの程度に考えているのか、その認識のなさが推測されるというものである。

東京では

梶谷典子

二月二〇日、都の行動計画の土台になる東京都婦人問題会議の中間報告が発表されました。(行動計画は六月にでき上る予定)

国の行動計画とは違って、全体に女性の労働権、経済的自立をかなり強くうたったものですが、家庭科については次のように書かれています。

「中学校・高校における家庭科は、男女とも必修にする方向で、内容を検討し充実していくための準備をすすめる」

男女必修とはっきり書かれましたが、ここに至るまでに会議のメンバーとお役所の間でかなり激しいやりとりがあったよう。高校家庭科指導主事は真向から特性論をふりかざし、「家庭科は主婦の準備教育であり、男子といっしょにすると内容が低下する。女は家庭に入るのが当り前、働きに出る場合でも家庭のことをちゃんとやった上でなければ」と発言されたとか。

これに先立つこと半年あまり、都で行った世論調査(二〇才以上の女性一五〇〇人が対象)では、「家庭科は男子も必修にすべき」という意見に対し、そう思う四三・九%、そう思わない三四・三%、わからない二一・四%、無回答〇・四%という結果が出ています。特に短大卒以上では、過半数が「そう思う」と答えています。

こうした世論を背景に、さらに共修を強く打ちださせるよう、要望書をつくるなど、世話人会では働きかけが続けています。(働きかけの詳細については、次号でお知らせします)

北海道から

斎藤節子

一月の二一・二三日と、札幌のホテル・アカシヤを会場に、延一三五名の参加を得て、北海道家教連十周年記念研究集会がもたれました。会長清野先生による「わが国の家庭経営概念の検討」。豊村先生による「諸外国における家庭科教育」についての記念講演にはじまり、「十年のあゆみ」「家庭科の指針基調提案」「男女共修の小・中・高における教育内容とその実践」「各領域別分科会」更に夜は、来賓を迎えての十周年記念祝賀パーティーとして、全道十四地区会員との楽しい交流を深めました。男女共修をめざしているのちとくらしを守る家庭科教育の十年の成果をふりかえり、明日へのエネルギーをたくわえることのできた、意義ある貴重な二日間でした。全道の仲間、市民運動としての「すめる会」をアピールし、新しい会員をふやしました。昨年七月の会報43号で、アピール文を掲載し、紹介してありましたので、目下一五名の会員中一三名が道家教連の会員で六%

にあたります。今年度の「すすめる会」の活動について次の様に話合いました。①より市

広い市民運動をめざし、各地区でのあらゆる人たちと手をつなぎ、世論を高めていくための組織と会員拡大 ②共修のための指針検討委員会による教育内容を、実践を通して確めよう ③自治体交渉をすすめる中で、共修の制度化をかりとろう。の以上で、当委員会名簿や、お誘いと加入申込書を作り、「家庭科、なぜ女だけ」の本や、パンフ、いわさきちひろの絵葉書などを拡めながら、輪を拡げていこうと取り組んでいます。

なお、二月一・二日は、十勝家教連が冬の合宿研を、音更町サイクリング・ターミナルで開きます。この会は三九年、小・中高・大・学生・一般の人々を加えて発足以来、毎月の学習会と事務局会議を定例化し、実践検討・テキスト学習を軸に、岐阜県の広さといわれる十勝の六八名の会員が、毎月自費で集まるわけで、道家教連にも三〇名が加入し、札幌での十周年記念には、一四名が出席しています。「すすめる会」のアピールと地域の活動をじっくりと、とり組まなければならないと思っています。

思えば、戦後の帯広でも、何処とも同じように、地域の父母の会に出かけて、新しい家

関西グループから

津村明子

庭科教育とホームプロジェクトを話し、今までの家事・裁縫ではいけなく、民主的な家族関係を中心にすすめることを理解してもらわなければなりません。また地域の有識者、市長、教授、報道関係の方々の協力を得て、学校家庭科顧問委員会を組織し、正しい父母の教育要求を掘りおこし、地域に根ざした教育内容を創り出し、施設設備、殊にマネージメントハウスの設立の陳情書を、道議会に提出もし、運動もしました。また、三一年度からのコース制廃除の闘いを通して、生徒の持つ可能性の押さえられること、学力と能力、性差別と家庭一般の問題点が深まり、初めて第十次全国教研に参加し発表したこと、また、三三年の家族、三二年からずっと手芸を、男女共に指導した経験から、高校生の生活意識調査を下に、男女共修の教育内容二単位試案を十四次福岡教研に発表、又、女子特

性論攻撃と家庭科学習の差別を、十八次熊本教研の人権と民族分科会で発表、また国民教育運動分科会の北見全道教研発表など……昨日のこの様に思い出されます。

全国の「すすめる会」の皆さんとの連帯の中で、頑張りたいと思いますのでよろしく願います。

「家庭科の男女共修をすすめる会・関西グループ」は、一九七六年一月に結成総会を開いて以来、文部省の教育課程審議会関西在住委員へ働きかけることから始めて、二年間さまざまな活動を続けてきました。

一九七七年七月に教課審の答申を受けた新学習指導要領が出されたのをきっかけに、これまでの運動の反省と、今後へ向っての運動の方向をきめるべく、会としての総括を出すことになりました。

しかし、「家庭科の男女共修をすすめる」というただ一点だけの一致が集まったグループの中には、さまざまな意見があり、「何のための家庭科共修か」という点では、なかなか一致が見られず、総括案が全体のものとならず年をこしてしまいました。大きな二つの流れとして①家庭科男女共修を、男女の役割分担固定の社会通念を打破する運動ととらえ、婦人解放運動と連動させていこうとする動き、②子どもの能力の全面発達の間として家庭科を位置づけ、男女平等教育の達成を主眼とする動き、があります。

二月五日(日)、例会をもち、再度総括案を討議し、もっと広範囲の人たちにアピールする内容に作りかえることに一致しました。

今後の活動の方向、事務局体制を検討しなおし、息長くこの運動を続け、より多くの人々に広げていくための方策を話しあいました。これまでは、会員の任意カンパによって活動資金を得ていましたが、再度よびかけをして、もう少し固定した会員を再結集し、会費を納入していく制度に変えようということになりました。

三月二十五日(土)に予定している例会にむけて、新しい制度の周知と会員の再登録、総括最終案の検討など、新たな第一歩をふみだすための準備が着々と進んでいます。

また、現在、指導要領の作成が進んでいる「高校家庭科一般」に対して、男女共修の要望書を採択し、文部省、各級の教育委員会、校長会に送付することになりました。

日本家政学会関西支部会

集会報告

香川敦子

五二年一月に関西支部会が姫路短期大学で開かれた。中学・高校での家庭科男女共修

について意見交換する集会在香川が呼びかけで持った。話題提供者として植野昭氏(神戸家庭科教育法担当)に依頼した。

せまい教室を準備したので三〇名の出席者であったが窮屈なくらいであった。資料(黄パンフ・赤パンフ・ふりかえる等)はすぐ売り切れた。

出席者は、原論の必要性を強く感じる高年齢層と、教育大系と家庭科教育法を研究したというより若年齢層があるように思われた。

集会ではあまり意見はなかったが、その後教人(主として若い人)が残って男女共修問題よりもむしろ大学における(家政学部・教育学部)家庭科教育不在が論じられた。このことは、男女共修をすすめることに対して、家政学会が無関心であることと深くかわる問題点と思う。

出席者名簿によって、往復ハガキで感想・意見を求めた。「家庭科を消費者としての経営の視点から」という植野氏の意見に対して「大変参考になった」「消費者運動とかかわりは」「共修との関係がとらえにくい」等があり、共修に関しては、「望ましいがよく内容を検討すべきだ」「現場の先生方と意見交換をしたい」「こうした会が持たれること

に期待する」「男女とも選択して自由に学習させるべきではないか」等、いろいろの返事が得られた。

特に封書で丁寧な返事をよせた韓国留学生(奈良女家政学部大学院修士)の意見は、家庭科で教える内容の整理(時間とみあったもの)家庭科はつまらないという考えをなおす運動の必要性、家政学を学ぶ学生が、自分は何もせず、つまらない学問だなどということをやめよう。共修はあたりまえのことであるが、教育法の検討が必要、など、具体的な細かなそして見事な日本語の文であった。

この集会の企画は五一年・五二年の家政学会中国・四国支部会での、ノートルダム清心加勢川氏と、聖カタリナ短大筒井まさを氏の主催された会に刺激されて行ったものであるが、家政学会員の中で、男女共修に関心のある人に、一つの場で話しあってもらう機会をつくることは大いに重要だと思ふ。こればかりで、関西支部役員会で、支部長(太田氏)はこの問題を支部としても取りあげるべきだといわれたとき。九州・関東・東北などの、「すすめる会」に関心があり、家政学会員である方がこのレポートをよんでお考え下されば幸いである。

前へ進む確かなあしあと

—近畿高等学校家庭科 研究大会の歩み—

京都府立田辺高校

森 幸枝

昭和五二年一〇月二六日・二七日の両日にわたって、第二八回近畿高等学校家庭科研究大会が京都に於いて開催されました。そもこの大会は、第二八回という数字からも明らかのように、戦後間もない頃から今日に至るまで、ずっと継続して毎年秋に催されて来た近畿地区二府五県の高家庭科研究会員の集いです。開催地は各県輪番とし、内容は毎年各県の研究発表を主軸としながら講演や討論などをつけ加えるのが通例で、二五〇名、五〇〇名の参加者があります。また、その年々の要求事項を持ち寄ってそれをまとめ、大会決議として文部省その他に提出することも、しきたりの様になっています。

さて、この大会は、これまで再三にわたり、文部省当局にその運営や内容についておほめも頂いて来た模範的な官制研究会であったといえますが、その雰囲気は、常に文部省や学習指導要領に対する信仰に近いまでの追従性

に支配されて来ました。それは、過去においても、開催県による創意工夫や、研究発表の内容、運営方法等についてもろの努力がなされて来たにもかかわらず、ちよつとやそのことでは覆すことが出来ないように思えました。そして、各県で夫々自主的な研究や実践が年を追って進められ、家庭科教育をめぐる様々の批判や期待が、国際婦人年や教育課程の改訂とかかわってマスコミの組上のぼって来たという状況の中でも、その保守的体質はなかなか変わらず、大会全体の空気を厚く被って来ました。

ところで私は、本年度の京都大会に終日じつくりと参加することができ、そこで「まさにここにも確かな前進がある」ということを実感として受けとめました。「家庭科の男女共修をすすめる」観点からみて、実に明確な変化のあしどりを、この目で確かめることができたのです。それは、過去何年もの間、自主的民主的な仲間が府県をこえて協力連帯し、営々として続けて来た努力の賜物であり、また、男女共修にかけて来た京都府立高校の県命を訴えにもよるものだといえましょう。それらの努力が、遅々として涉らないかに見えた前進を加速させ、一見無風にして不毛の地とさえ思われたこの大会においても、立派

を与えられた様に思います。五〇年度大会では、丹後の網野高校から自校の実践を中心に、全府立校での二、三年目の歩みについて発表しましたが、その際全府下の様々な学校(全・定・農村・都市等)から、生徒のレポートや感想文・授業風景・文化祭参加の模様等々を持ち寄り、会場コーナーを設けて貰って展示しました。昼休みには、狭いコーナーが沢山の他県の先生方で埋まりました。当時、私達は何とかして他府県の先生方に、京都の共修についての正しい理解をしてほしいと切望していました。そして、「特定の学校だけがやっている」「他教科の先生にやって貰っている」「家庭科でなく社会科になってしまっている」などという誤解や中傷をはねのけることが、京都での共修の定着と前進の為に、また他県の志を同じくする仲間の為にも、ぜひとも必要でした。この展示は、市内定時制の先生のアドバイスを受けて係が立案し、各校に呼びかけて実現したもので、研究発表に当たっているにない、提出する義務があるない等関係なしにあれだけのものが集まったのは、何よりも私達自身の自覚の高まりや自信の深まりを示すものであったと思います。従来からの、自分の実践を公表しない事をもって、謙譲の美德として来たような官制研究会の気

風を思えば、大きな前進でありました。そして、この度の北桑田高校の発表は、過疎に悩む農山村の生活課題をふまえ、いのちと暮らしを守り高める家庭科教育を、学校の教育方針の中にしっかり位置づけたものでした。また、若い先生のひたむきな発表を聞きながら、やと京都の共修も夫々の学校でそれなりに根づき、後に続く若い先生方によってより高められて来ていることに、私は深い感慨を覚えました。さらに、市立や私立から研究発表のあった四七・四九・五一年度においても、決議要求やパネル討議などの中で「共修をすすめる」方向での努力をして来ています。

さて、このように進めて来た本年度大会では、決議案(開催県が他県の要望も入れて原案を作る慣例)の数項目の中に「家庭一般を男女ともに履修できるように制度の保障を図られたい」を入れました。ところが、これに對して、その前文の文章表現が京都的である(商業新聞に日常的に使われている表現で「たが」ということと共に、いくつかの県から事前に修正せよという強い要求が何回もあつて係の先生を悩ませました。これは、原案賛否の意見は当日に出すのが原則であり、従来は殆ど拍手多数ですませて来たことから思えば全く異例の事でした。大会当日より二ヶ月

も前に、決議されたものとして決議文を文部省に提出してしまつていたというひどい年もあつたくらいなのですから……。そこで京都としては、あくまでも大会当日に討議すること、採択時には人数を確認することとし、討議の予定時間四〇分を倍増する用意をしました。当日は案の定、各県代表(校長や役員)が次々と反対し、その殆どが理念としてはよいが時期尚早ということでした。その意見が会場の空気を圧倒するかに見えたとき、一人、二人、三人と若い先生方の遠慮がちなしかし鋭い反論が出て、各県に原案支持者のあることが示されました。延々と倍増した時間でもなお不足して、決議は遂に大会行事終了後となりました。恐らく原案が通ることは無理、本年は決議無しでもよいではないかと私達は考えていました。ところがです。採決寸前に大量の帰宅者(約四〇〇名中一〇〇名位)が出たものの、三県からの修正案が次々否決され、最後に残った原案に対して圧倒的多数の起立者があつたのでした。

それは、この大会の民主化や科学化を願ひ、そのことが家庭科教育の民主化や科学化を進めることになるし、その具体化として男女共修の実現があると考えて来た私にとって、とても嬉しい幕切れでした。何れまた、来年度

奈良大会は、事もなげに従来通りの調子で事が運ばれるでありました。しかし、その底にはたくましいエネルギーが貯えられつつあるということを、私は信じる事が出来るのです。ただし、採決での意思表示すら逃避した多数の人達があり、「この様な事を申し上げて、また後から叱られるかも知れませんが……」と若い先生が前置きをしなければならぬのが現状です。「家庭科の男女共修をすすめる会」をはじめとする幅広い運動の広がりによって、まだまだがんばらねばならないと思っております。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

日教組教育研究 沖縄集会の報告

和田典子

一、男女共学のとりくみが前進した
さる一月末、四日間にわたって開かれた全国教研には、約一万人が参加し、現場実践を学び合いながら問題点と今後の課題をあきらかにしました。

そのなかの家庭科分科会には、連日約二〇〇人が集まりましたが、提出されたレポートは小学校一四、中学二四、高校一〇、小・中

あわせたもの三、合計五一篇にのぼっていました。うち男女共学をテーマにとり上げたレポートは一四府県から提出され、冒頭、正会員からの討議に対して出された要望も約半数が「男女共修もんだい」をとり上げてほしいとの発言でした。

男女共学についての討議は、二日目の中学校、高校小分科会と、三日目の全体討議のなかでかなりの時間をかけて討議されましたが、中学校の学習指導要領改訂を受けて、いよいよ移行期に入る現場の、共修問題に対する関心が高まってきたことがうかがわれました。また、レポートの内容からも、各地で共学の実践が着実に伸展していることがうかがえました。

二、共学についての基本的な考え方に ついては共通理解に達した

家庭科の共学は、子どもの自立にとっても、性差を不当に意識させないためにも重要であり「家庭生活とは何か、家庭生活の法則をきちんと把握させることは男女を問わず必要である」という点についての異議はありませんでした。また、官制研究会でも共学をとり上げざるを得なくなってきた県も増えてきていることも報告されました。

三、共学を実現する上での困難がどこにあるかが整理された

男女ともに生活的に自立できる子どもを育てる意義は理解できても、共学を実現するためには①学習指導要領の内容に問題があり、②削減された時間も障害になる、また、③教員定数や施設設備なども不十分である上、④教師の意識や力量にも問題がある。などが指摘されて、解決すべきことがあきらかになりました。そのなかで当面の課題として単学級編成の実現を技術科とも協力しながらすすめる、共学では複数担任制が実現できる方向でとりくむことの意義が確認されました。

四、できることから、できる方法で共学 を実践することがたいせつ

特に、中学校の共学を中心に論じられましたが、実践している都府県の実践から学んで、①技術科と家庭科は平等に共学にする。が、あくまでも現場の条件にあわせて弾力的にすすめる。②同一内容、同一方法、同一教室の共学にする。③食生活・住居（環境づくり）保育（性）の三領域はぜひとり上げたい。④担任はそれぞれの専攻を生かして分担する。⑤教える内容は自主編成しなければならぬ。などが話し合われました。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

世話人会報告

二月二日

- 1、『家庭科、なぜ女だけ』の本の販売を促進する方法について（皆さんも協力をお願いします）
- 2、一月一四日の集会のテーマとゲスト
- 3、黄バンフ（一問一答集）、赤バンフ（実践集）について、よく売れている黄バンフを現状に即したものに改訂し、父母・生徒などにも向くよう、次回までに各自検討していただく。赤バンフの続編として、第二集『中学校技術・家庭編』を五三年度中に、第三集『高校家庭一般編』を五四年度中に作る。

- 4、第二集のために、一月の集会后、中学校の先生方が欲しておられるバンフについて 中川和・徳田真澄氏らに意見をうかがう。
- 5、中教審の新メンバーへの働きかけを検討。
- 6、市川氏が年末の国会で家庭科について質問されるので都合のつく者が傍聴する。

（半田たつ子）

二月一〇日

- *黄バンフの改訂について話し合い。
- 中・高校生、一般向きに読みやすい内容に

する。資料を足したり、国際婦人年以降、ふさわしくない部分は手直しする。完価は百円のまま。

*昭和五三年一月一四日（土）の集会「生徒が語る家庭科共修」には、都周辺の家庭科の先生方に出席を呼びかける。

*昭和五三年一月二八日（土）に渋谷の山手教会で、「語ろう女たち」の会で、アピールする。バンフレット、本などを売る。

*二月一六日の決算委員会で市川議員が文部省に質問の予定。

*「家庭科、なぜ女だけ」がいよいよ発売ですが、みんなで協力して多くの方に読んで頂くというつもりになりました。

（八島紀子）

一月一四日

◆来年度会費について。

五三年度も年間会費は二千円とする。

◆総会及び集会について。

新年度の総会は四月二二日（土）の集会のあとにする。集会テーマ、高校改訂指導要領検討。

◆一月二八日の「政治を変えたい女たちの会」

で本やバンフの販売、会の宣伝をする。

◆行動計画に共修を盛り込んでもらう。

各地方自治体の行動計画に共修を盛り込んで

もらうために要望書を発送する。中教審にも働きかけましょう。

◆赤バンフ、黄バンフの改訂について。

中学の一部共修に役立つ赤バンフを作る。共修の重要性や共修に際しての助言も入れる。今年の夏休みには原稿をまとめる。黄バンフについては、出来るだけ早く取りかかる。（原案 梶谷、年表 佐藤）

（中嶋里美）

二月四日

はじめに、次の二点を検討し、決めました。

一つは、各自治体で進行中の「行動計画」に向けての要望書の文案です。（ただし、策定しない自治体にも出します）。

もう一つは、「家庭科の男女共修をめぐる一問一答」（黄バンフ）の「まえがき」。

「アピール文」、問答の一部の改訂原稿案です。そのうち、高校の学習指導要領に関連のあるところは、新要領が出てから一部手直しする。また、年表は、資料も含めて三頁分増やし、発行時期は、四月総会（二二日）に間に合うようにする。

さらに、総会会場の予約を確認すること、「ホーキ星」に「家庭科、なぜ女だけ」を委託することに決めました。

（青山和世）

☆会費納入について

間もなく七十七年度が終り、七八年度に入り
ますので、七八年度の会費をおおさめくださ
いますよう、お願いいたします。七十七年度の
決算と七八年度の予算については、総会で承
認していただくこととなりますが、世話人会
では、七八年度の会費も年間二〇〇〇円にき
めました。

納入はできるだけ郵便振替でお願いします。
振替番号は東京九一―九一八九一です。

七十七年度会費をまだおさめになつていな
い方は、至急お願いいたします。

なお、カンパはいつでも、幾らでも大歓迎
ですが、あるいは少額（一〇円または五〇円）
の切手でも結構です。

☆会への連絡について

「会」にはまだ専従者を置くだけの力があ
りませんので、ふだんは事務局には誰もおり
ません。連絡は電話でなく、郵便でお願いい
たします。

緊急の場合には左記へお電話ください。

〇三―九四五―六二六四

家政教育社 半田たつ子・馬場洋子

なお、転居あるいは氏名の変更をなさると

きは、必ず事務局にお知らせください。

☆新しいパンフレットについて

世話人会の報告にもありますように、中学
での技術・家庭科の共修をすすめるために役
立つような新しいパンフレットの発行を計画
しています。

内容は、三年間を通してのプランの例、食
物、住居、保育の領域での授業の展開例、さ
まざまな障害を乗り越えるにはどうしたらよ
いか、など。春に案をまとめ、秋には発行の
運びにしたいと思っています。

お願い

編集部

「こんな
な風に
して共
修に成
功した」
あるい

は「こんな事情で共修は実現しなかった」と
いうような体験や、「こんなことを内容に入
れてほしい」というご意見を事務局までお寄
せ下さい。

☆「一問一答」の改訂版について

パンフレット「家庭科の男女共修をめぐる
一問一答」はおかげさまで一万部近く売れま
したが、会の組織も発行当時とは変わりました
し、内容的にもやや古くなった部分があり
ます。更に多くの方々に共修の意義を理解し

ていただくためには、このような基本的な考
え方を説いたものはまだ必要ですので、改訂
版発行のための作業をすすめています。

総会までには発行の予定ですが、運動に参
加しようとする方ばかりでなく、父母、生徒、
地域の一般の方々にもできるだけ読んでいた
だきたいと思っています。

一部わずかに一〇〇円（送料は一部七〇円
かかりますが）ですので、ぜひ大量に販売し
てくださいますように、

☆「家庭科、なぜ女だけ？」について

「――家庭科をめぐる議論の内容を整理す
るのに格好である。しかし家庭科についての
議論もさりながら、評価しなくてはならない
のは女性が起こしたこの運動自体の意義であ
ろう」（二月三日経夕刊）等、おかげさま
で好評です。ぜひ学校、職場、地域の皆さん
におすすめてください。

☆各種集会の情報について

世話人はあちこちの集会に出かけてアピ
ルしたり、資料を販売したりしています。婦
人団体関係以外の集会の情報はなかなかつ
かめません。教育、生活、文化、消費問題関
係等の集会でもアピルしたいと思ひますの
で、そのような集会についての情報がおわか
りの方は事務局までがきでお知らせください。